

# 図書館学思想の起点

—Richard de Bury の思想を中心として—

小 倉 親 雄

## 1

いまから130年近くも前の1846年という早い時代に、“図書館学概要”<sup>1)</sup>と題して、小冊のものながら、きわめて重要な著述を公刊し、19世紀前半期におけるドイツ図書館学思想形成の上に、大きな足跡をとどめているツォラー (Edmund Zoller, 1822-1902) は、フランスのノーデ (Gabriel Naudé, 1600-'53) を、その著“図書館建設のための意見書”<sup>2)</sup>によって、“図書館学の建設者” (Gründer) として位置づけている<sup>3)</sup>。そして同時にまた、そうした思想の起原をさらにさかのぼってたずね、このノーデよりざっと300年ほど前に生存して、‘中世イギリス最大の個人文庫’<sup>4)</sup>を築き上げ、また“愛書”<sup>5)</sup>と題する著述によってその名が知られているリチャード・ド・ベリ (Richard de Bury, 1287-1345) のこの書物に対しては、‘ライブラリー・エコノミーの最初の基礎づけ’ (Begründung der Bibliothekonomie) を行なったものとしての評価を加えている<sup>6)</sup>。それはこの著作が‘非常にすぐれた書物愛、そして図書館に対するきわめて深い理解’のもとで書かれた証跡を留めているとみなしているためである。またプレディク (Alfred Predeek, 1883-) は、図書館行政 (library administration) に関する限り、イギリスにおいて、歴史上最も早くそれについての発言を行なった人物としてこのド・ベリを回想し<sup>7)</sup>、ヘッセル (Alfred Hessel, 1877-) もまたこの“愛書”は、たとえ中世的な衣服をまとったものであるとしても、その中には立派な図書館論 (Bibliothekslehre) が蔵せられており、この書の魅力はこの事実と、つぎには著者

1) Zoller, E.: Bibliothekswissenschaft im Umrisse, Stuttgart, 1846, 72 p. 17.5 cm. なおツォラーとその思想については、下記拙稿を参照。

「ドイツにおける図書館学思想の形成とその起原」(図書館界第23巻第3号 昭和46年9月)

2) Naudé, G.: Avis pour dresser vne bibliotheque. Présenté à Monseigneur le Presedent de Mesme. Paris, F. Targa, 1627. なおノーデとこの著書については、下記拙稿を参照。

「図書館学思想の発生基盤—Gabriel Naudé の思想を中心として—」(京都大学教育学部紀要第18号 昭和47年3月)

3) Zoller, E.: Die Bibliothekswissenschaft. *Serapeum*, Jg. 9 (1848), S. 134.

4) Kelly, Thomas: Early public libraries; a history of public libraries in Great Britain before 1850.. Lond., Lib. Assoc., 1966 (Reprinted 1969), p. 27.

5) Philobiblon, sue de amore librorum et institutione bibliothecarum tractatus, 1345.

6) Zoller, E.: *Ibid.*, *Serapeum*, Jg. 11 (1850), S. 126-127.

7) Predeek, A.: A history of libraries in Great Britain and North America, tr. by L. S. Thompson. Chic., ALA., 1947, p. 22.

その人の人間性、それに集書家としての熱情が、みずからの手によって生き生きとした形で描き出されている点にあることを指摘している<sup>8)</sup>。

このようにライブラリー・エコノミーの基盤設定、図書館行政への言及、図書館論の開陳という形でド・ベリとその著“愛書”は、後世のとくに図書館に対する思想史的な研究を志向して来た人々によって捉えられて来た。そしてスタインバーグ (Sigfrid Henry Steinberg, 1899- ) によってノーデの“意見書”に対するこの“愛書”の関係は、‘最もすぐれた中世での先輩’(medieval predecessor) として位置づけられ、その思想的な関連性が付与されている<sup>9)</sup>。しかしながらこうした捉え方のいわば先達的な地位にあるツォラーの上記発言は、けっして偶然に生まれて来たものではなく、その背景にはドイツにおいて19世紀のはじめから次第につちかわれて行った図書館学思想の形成過程がある。すなわちこの国においてはシュレチンガー (Martin Wilibald Schrettinger, 1772-1851) により1707年、おそらくは世界ではじめて“図書館学” (*Bibliothekswissenschaft*) の話が採択されたが、それからあとの19世紀前半期は、もっぱらその思想形成の時期に該当し、またその第一段階を一応終了した時でもあったからである。しかもその起点に立つ人がシュレチンガーであり、到達点に位置している人物がこのツォラーであった。そして上記の発言は彼が1848年の2月から51年の3月におよび、8回にわたって連載した論文“図書館学”の中でなされたものである。彼はこの論文の冒頭において、科学としての図書館学が構成されたのは19世紀であり、したがって若い学問であると記したあと、その理由として、19世紀以前にあって図書館の整備 (Einrichtung) についての学問的な論考は数多くなされて来たにもかかわらず、実はそれと同様に重要な他の側面が学問的な承認と重要性とを獲得するに至ったのが19世紀以降であったことを指摘している<sup>10)</sup>。その“他の側面”というのは、いうまでもなく“図書館行政” (Verwaltung) のことに外ならないが、ツォラー自身も、この“整備”と“行政”という両側面をもって図書館学は構成されるとの考え方に立つ人であった。彼はこの点について、‘図書館学は図書館の整備と行政についての学問 (Lehre) 以上のものでも以下のものでもなく、それだけのものであるというのが私の意見であり、この見解はますます強固なものとなって行くであろう’<sup>11)</sup> とのべている。またグレーゼル (Arnim Graesel, 1849-1917) も‘ツォラーにとって図書館学とは、図書館の整備と行政に関する学問であり、それはいろいろな図書館の実際から得られた経験を基にした諸原則の総括である’とも、また‘ツォラーはこの2つの主要部 (Hauptteile) を同じように受けとっていた人である’<sup>12)</sup> とも記している。しかしながら19世紀の前半もやがて終りを告げようとする1848年2月の時点に立って、その前半期の成果を総括して彼は、‘図書館学の多くの面がなお等

8) Hessel, A.: Geschichte der Bibliotheken; eine Ueberblick von ihren Anfängen bis zur Gegenwart. Göttingen, H. T. Pellens, 1925, S. 46.

9) Steinberg, S. H.: Five hundred years of printing. Lond., Gaber & Faber, 1959, p. 181.

10) Zoller, E.: *Ibid.*, *Serapeum*, Jg. 11 (1850), S. 126.

11) *Ibid.*, *Serapeum*, Jg. 9 (1848), S. 131.

12) Graesel, A.: Handbuch der Bibliothekslehre. 2te Aufl Lpz. 1902, S. 8, 12.

閑に付されたままであり、分類と体系化、目録作成と配列、とくに行政の問題についてわれわれが明らかになし得たところはきわめて少い<sup>13)</sup>と述懐している。

ツォラーがよって立つこのような立場は、けっして彼独自のものではなく、グレーゼルのいうようにエーベルト (Friedrich Adolf Ebert, 1791-1834), ついでモールベッヒ (Christian Molbech, 1783-1857) などの思想的伝統を受けついでのものであったが<sup>14)</sup>, その過程の中でド・ベリとその“愛書”が彼にとっては重要な意味をもって回想されている。彼が前記論文の中で、‘われわれには、厳密な意味における図書館学に対して、この書物の中から何を引き出すことができるかを伝える義務がある’<sup>15)</sup>とのべているのは、彼を含む同一思想の系列下にある人々に対し、この書が重要な影響を与えたことに触れたものであるが、このことばに引きつづいて彼は“愛書”を形づくっている合計20章の中、第1章から16章までは愛書家 (Bibliophile) に対するもの、つぎの3章 (17-19) が図書館員に対して関心の深いものとしての、一応の区別を行った上でその内容に言及している。グレーゼルによるとこの書物は、18世紀の末シェルホルン (Johann Georg Schelhorn, 1733-1802) による指摘があつて以来<sup>16)</sup>, ドイツの間では、図書館の価値 (Werte) とその整理 (Anordnung) とについて論及した文献の中では最も古く、しかも賞賛すべきものとして、その地位を保っているという。そしてツォラーは、この書物の中に非常に気高い書物愛、そして図書館についてのきわめて深遠な理解を示す証言を発見して、“ライブラリー・エコノミーの基礎づけ” (Begründung der Bibliothekonomie) がなされたのはこの書物によってであることを要求すべきであるというふうに信じた人であったとも付け加えている。しかしながらこの国におけるド・ベリへの回想は、ツォラーがこの論文を掲載した年 (1848), さらには“図書館学概要”を公刊した年 (1846) に先立つ3年前の1843年に、すでにフォーゲル (Ernst Gustav Vogel, 1797- ) により、愛書家としてのド・ベリについて、その経歴・学識・著述・ダラム大学図書館との関係を中心とした略伝が試みられており<sup>17)</sup>, おそらくはドイツにみられたこのようなド・ベリ回想の一般的風潮に影響されるところも少なくなかつたであろう。このことについてツォラーは、‘ダラムの司教であり、イギリス王エドワード三世の官房長 (Kanzler), そして大蔵大臣でもあつたビュリ (Bury oder Edmundsbury) のリチャード (Richardus Aungervyle) は、1344年その著“愛書”を執筆した。そして書誌学者フォーゲルは“セラピウム”誌 (Serapeum) 1843年号140, 141ページにこの博学なベネディクト教団修道僧の著作の中で、現存している書写本20点を列挙しているとのべて、

13) Zoller, E.: *Ibid.*, *Serapeum*, Jg. 9 (1848), S. 33.

14) Graesel, A.: *Ibid.*, S. 8.

15) Zoller, E.: *Ibid.*, *Serapeum*, Jg. 11 (1850), S. 127-128.

16) Graesel, A.: *Ibid.*, S. 38. シェルホルンの著“Anleitung für Bibliothekare und Archivare... Ulm, Auf Kosten der Stettinischen Buchhandlung, 1788-91,” (2v. in 1, 20cm) によってそのような指摘がなされたことを指す。この書はライブラリー・エコノミーをその内容とし、第3巻で文書館を取扱う予定になっていたが、ついに刊行をみなかったという (L. C. Card)。

17) Vogel, E. G.: Richard von Bury, Bischoff von Durham, und Gründer der Bibliothek im Durham College zu Oxford. Erster Artikel, Erinnerungen an einige verdienstvolle Bibliophilen des vierzehnten und funfzehnten Jahrhunderts. *Serapeum*, 4 (1843), S. 131-141, 154-160.

このフォーゲルによる論稿に言及している<sup>18)</sup>。彼によるこの一文は、14および15世紀中、顕著な功績を後世に残した若干の愛書家を取り上げ、その人物を回想する形で執筆した初回の論文であり、このド・ベリに引きつづいて、グロスター公ハンフリー(Humphrey, Herzog von Gloucester, 1391-1447)、コンスタンチン・ラスカリス(Constantin Lascaris, 1434-1501)、ヤメウス・ラスカリス(Janus Lascaris, 1444-1535)の3人が選ばれている。ハンフリーはヘンリー四世の末子であり、ヘンリー六世幼時の摂政となった人であるが、図書の収集家同時にオックスフォード大学内の神学校(Divinity School)の創設者であり、また同大学のハンフリー公図書館(*Duke Humphrey's Library*)は彼が寄贈した蔵書(500~600冊)を基に設立されたものであった。またラスカリス兄弟は共にビザンチンの学者であり、ギリシャ古文書の収集に大きな功績をとどめている。

いずれにしても1840年代、すなわち“図書館学”という言葉がようやく定着期を迎えたその時期において、愛書家・書誌学者・図書館人によってド・ベリとその“愛書”が大きな関心を引き起こすようになった事情を想察することができる。ツォラー自身の場合についていえば、ノーデは“われわれの学問の創建者”(Gründer unsrer Wissenschaft)であり、“近代的な図書館整備”(moderne Bibliothekleinrichtung)はこのノーデの時代をもってようやく始まる<sup>19)</sup>との立場に立脚して、ド・ベリとその“愛書”のもつ歴史的な意味がたどられている。しかしながらド・ベリの時代は中世末期としようもの、なお14世紀の前半であり、そのような早い時代に、ライブラリー・エコノミーの基礎づけ、図書館行政にかかわるすぐれた、しかも最初の発言者をもつことの意味は、近代的な図書館学思想のいわば起点を求める立場からは、きわめて重要な課題といわねばならないであろう。

## 2

このド・ベリは、イングランド東部サファク州(Suffolk)ベリ・セント・エドマンズ(Bury St. Edmunds)の町に近い伯爵領(Grabschaft)で1287年1月24日に生をうけた。本名はリチャード・アウンガーヴィル(Richard Aungervyle or Angerville)。リチャード・ド・ベリという通称はこの生地に関んだものである。その生年については、それを1281年としているものも少なくないが、このことについてグレーゼルは、その理由を、コットン本(Cotton copy)末尾の記載を誤読した結果に帰している<sup>20)</sup>。一方またその生地には当時規模の大きな修道院文庫があり、彼につちかわれた書物に対する異常な関心を、この文庫の存在と直接結びつけて考えようとする人々があることに対してティラー(Archer Taylor, 1890-)は、‘そのような推測を支持するに足るだけの特別の証拠がある訳ではない’として、むしろ消極的な立場をとっている<sup>21)</sup>。また彼の家族は

18) Zoller, E.: *Ibid.*, *Serapeum*, Jg. 11 (1850) S. 127.

19) Zoller, E.: *Ibid.*, *Serapeum*, Jg. 11 (1850), S. 139, 140.

20) Graesel, A.: *Ibid.*, S. 39 (*FuBnote*).

21) Taylor, A., tr.: *Advice on establishing a library*, by Gabriel Naudé. Berkeley & Los Angeles, Univ. of Calif. Press, 1950, ix (*Introduction*).

ノルマン系で、イングランド中部のレスターシャー州 (Leicestershire) に定住したものの子孫であるが、彼自身は幼くして両親をうしない、ために母方の叔父 (John de Willoughby) のもとで育てられ、オックスフォード大学において哲学と神学を学んだ (1302-'12)。そして彼が聖職者としての道を選んだことについても、この叔父が牧師であったことによる影響とみなしている人もある。またその在学中のことについてフォーゲルは、'勤勉であり、また規則正しく、その模範的な生活態度において抜群'であったといい、さらに全課程終了後、ダラム (Durham) のベネディクト教団 (Benedictinerorden) に入って行ったが、'すぐそのあとで' のちのエドワード三世である当時のエドワード王子の扶養掛 (Hofmeister) に抜てきされたと記している<sup>22)</sup>。しかしながらこの教団入団のことについては疑義をさしはさむものがない訳ではない。オー (Charles Orr, 1862-) が'彼は大学を去るに当って、ダラム修道院の修道僧となったというふうにこれまで書かれて来たが、その信拠性にはいささか欠けるところがある'<sup>23)</sup>と記しているのはその一例であるが、フォーゲルの表現からもうかがわれるように、在団の期間はいずれにしてもきわめて短いものであったことと、この信拠性の欠如との2つはおそらく相互に関連性をもつものであろう。いずれにしても彼はこの教団と深いかわり合いをもつ人物であり、ツォラーによっては既述のように“博学のベネディクト教団修道僧”(Benedictiner) という表現が与えられている。

エドワード三世 (1327-'77在位) の王位就任は1327年1月14日であり、ド・ベリが満40歳に達する直前のことであった。そして王の即位と共に次第に重用され、教皇庁使節 (1330, 1333)・王じ尚書・大法官職・ダラム司教などの顯職を歴任、とくにダラム司教としての地位は1334年6月5日からその没年に至るざっと11年間に及んでいる。いうまでもなくこのダラムはイギリス司教管区の中では最も富裕であったばかりでなく、ロンドンからは遠く隔っており、そのうえスコットランドに近い地理的事情も加って、政治・宗教的にきわめて重要なところであった。そしてこの司教は事実上の副総督 (pro-consular), 副国王 (vice-regal)<sup>24)</sup>でもあり、またその教会は995年に創建されたイギリス最古のものとしてその權威を誇るものであった。要するにド・ベリは、聖職者としても、また行政官・外交官・宮廷官としても最高の地位を保有した人といえるであろう。彼は1345年4月14日をもってオークランド (Aukland) の司教公邸で死去し、ダラムの大聖堂、聖マグダリーン (St. Mary Magdalene) の祭壇の前に埋葬された。

ド・ベリの著“愛書”は、おそらく彼にとって、ただ一つの著作であろうという<sup>25)</sup>。そのみならず、その収集した集書も結局は散逸の運命をたどり、みずから作成し終ったことを記している蔵書目録も失われて今日に伝わらず、さらに彼の墓所も清教徒革命 (1642-'49) に際して破壊され

22) Vogel, E. G.: *Ibid.*, S. 132.

23) Inglis, John Bellingham (1780-1870), *tr.*: *Philobiblon; a treatise on the love of books* by Richard de Bury, Bishop of Durham, treasurer and chancellor of Edward III. N.Y., Meyer Brothers, 1899, *xii* (*Introduction by Charles Orr*).

24) Irwin, Raymond: *The heritage of English library*. Lond., George Allen & Unwin, 1946, p. 182.

25) Thornton, John L.: Richard de Bury (1287-1345), *Selected readings in the history of librarianship*, 1966, chap. 3 (p. 20-21).

たために、いわばこの“愛書”が彼を偲ぶ唯一のかたみともいうべきものになったという<sup>26)</sup>。そしてこの書の稿は、1345年1月24日の誕生日に、上記の司教公邸で最後の筆を置いたものであるが、しかしながら彼はすでに3年来病氣療養の身であり、ためにその死期の間近かであることを予想しての執筆であったと伝えられている<sup>27)</sup>。事実彼に死が訪れたのは、その稿を終わってからわずか3か月足らずのことであった。

このようにして完成した書稿も、活字印刷がまだ行なわれていなかったために、印刷に付されるまでには、128年という長い歳月が経過している。すなわちそれがはじめて公刊されたのは1473年ドイツのケルン(Köln)においてであり、わずか48葉(4つ折本, 1ページ26行, 14×21cm), 標題紙・序文・頁付・見出しなども付けられないままのものであった<sup>28)</sup>。しぜん伝えられた書写本の種類も非常に多く、1888年トーマス(Ernest Chester Thomas, 1850-1892)がラテン語原文に英訳を付してロンドンで刊行したとき参考とした書写本の数は28種にも上り、現にイギリス国内における多くの主要図書館、それにスペイン、イタリー、フランス、ドイツ、ベルギーなどの各国図書館に伝えられているという<sup>29)</sup>。1843年フォーゲルが自分の知り得た限りの書写本、しかしその調査・計数は決して完全なものではなく、なお多くのものがあちこちに秘蔵されていることは確実であると断わりながら列挙したその数20点<sup>30)</sup>にさらに8点が加っている。また刊本としては上記ケルン版をはじめとして、スパイエル(Speyer, 1483), パリ(1500), オックスフォード(1598, 1599), フランクフルト(1610, 1614), ライプツヒ(1674), ロンドン(1832), パリ(1856), オールバニー(Albany, N.Y., 1861), ロンドン(1888)と相つき、1832年のロンドン版以後でも12種を越える諸版がつくられている<sup>31)</sup>。そしてラテン原文によるもののほか、独・英・仏・伊・ポーランド・スペインなどの諸国語に翻訳されており、要するに書写本・刊本を合し、異本・異出版物の数は多数に上っている。

アーウィン(Raymond Irwin, 1902-)が指摘しているように<sup>32)</sup>、このド・ベリの図書館史上に占める意義については、2つの例面から考察することもできるであろう。その1つは豊富な

26) Irwin, R.: *Ibid.*, p. 195. しかしながらトマスによる英訳本(注29)にはド・ベリのシール(*The Seal of Richard de Bury|Bishop of Durham*)の写真が口絵として掲げられている。これについての説明はなされていないが、オアの記するところに従うと(注23), ド・ベリの墓石上には、彼自身の肖像が真ちゅうに、きわめて念入りに、また人工的に刻まれ、それは12使徒の画像といっしょに画かれたものであったという。また彼の銀のシールの押印が現に残存しており、その1つは上記墓石上の画像とかなり一致したものであるという。トマス英訳本に付したものは、おそらくそれであろう。またティラー英訳本(注21)の口絵にも同種の複製がかかげられている。

27) Irwin, R.: *Ibid.*, p. 194.

28) Inglis, J. B., tr.: *Ibid.*, xxix (Introduction). この序文(xxvii-xxvi)の中の一節“Editions and Reprints of the Philobiblon since 1473”には、異版本12種についての解題がある。

29) Thornton, J. L.: *Ibid.*, p. 20; Thomas, E. C., tr.: *The love of books; the Philobiblon of Richard de Bury newly translated into English by E. C. Thomas. Lond., Alexander Morning..., 1903, xv (Preface); Taylor, A., tr.; Ibid., Blurb.*

30) Vogel, E. G.: *Ibid.*, *Serapeum*, Jg. 4 (1843), S. 140.

31) Thornton, J. L.: *Ibid.*, p. 21.

32) Irwin, R.: *Ibid.*, p. 182.

蔵書その内容とした彼の文庫 (*Bibliotheca Ricardi de Bury*) であり、他はその著“愛書”である。その中文庫は中世イギリス最大のものであり、結局宗教改革(1517)以前にあっては、彼に比肩し得るほどの図書収集家については現われて来なかったほどである<sup>33)</sup>。またその蔵書数について一般には1500冊前後と推定されているが、それはただ荷車 (cart) 5 台分に相当するものであったとのある記録をもとに、一台分を少なくとも 300 冊と見積った上での概算にすぎず<sup>34)</sup>、したがって正確な数については依然として不明のままである。また収集の動機そのものについてロンドン大学のヴァイス教授 (Roberto Weiss) は、ド・ベリをもって‘イギリスにおける最初の集書家’として位置づけたあと、彼が書物を必要としたのは特殊な理由によってではなく、真に書物を愛し、その内容を正しく評価し、物質的な装いを鑑賞し、そしてそれらを所蔵する喜びこそ、彼をして収集の努力に駆り立てていったものに外ならないとのべている<sup>35)</sup>。すなわち愛書家 (bibliophile) としての側面からのみ彼をながめようとするものであり、みずから愛書家をもって任ずる人々の間に数多く共通してみられる立場である。もちろん彼における書物愛好の念はきわめて深く、“愛書”第11章の中でも‘少年時代以来自分の心は強烈な書物愛で占められていた’とのべているほどであるが、しかし図書収集の目的は‘明らかに自己本位のものではなく’<sup>36)</sup>、のちに詳述するとおり学問の研究と進歩とをひたすらに願って、自分の蔵書を基礎とし、人々の利用に供する図書館の建設を祈念していたためであった。

アーウィンによると、ド・ベリは自分の収集した図書はすべてそれを大学の利用 (academic use) に供する明確な企図のもとでなされ、究極的にその生涯は、一般公衆の利用を考慮したきわめて明白な目標に向けて捧げられたものであったとのべ、さらにそのような企画はイタリー・ルネッサンスの始祖ペトラルカ (Francesco Petrarca, 1304-’74) といわば共通の基盤をわかち合うものであると付け加えている<sup>37)</sup>。すなわちこの2人における愛書と集書は、最終的には一般の利用を前提とし、その意味において同一基盤に立つものであることを強調しているものである。

このペトラルカは、ド・ベリより17歳年少であるが、彼が古典を探求し、収集し、謄写し、翻訳して築き上げた個人文庫、そして‘あたかも神殿のごとくに守護して来た’<sup>38)</sup> その集書を、死去する12年前の1362年、聖マルコ会堂 (*S. Marco-Kirche*) に寄託し、一方ベニス政庁に対してはその保護と育成とを依頼した。結局彼はその寄託集書をもって基本蔵書とし、その基礎の上にやがては大規模の図書館が建設されることを祈念しながら世を去った。もちろん彼のそうした願いはついに実現をみるに至らなかったとはいえ、思想的には古代ローマにつくられたことを伝えてい

33) *Ibid.*, p. 195.

34) Thompson, James Westfall: *The medieval library*, reprinted with a supplement by Blanche B. Boyer. N. Y., & Lond., 1965. p. 384, *Footnote* 37.

35) Weiss, Roberto: *The private collector and the revival of Greek learning*. *Wormald, F. & Wright, C. E., ed.: The English library before 1700*. Univ. of Lond., 1958, p. 113.

36) Thomas, E. C., *tr.*: *Ibid.*, xii, xiii (*Footnote*).

37) Irwin, R.: *Ibid.*, p. 183.

38) Hessel, A.: *Ibid.*, S. 49.

る公開の図書館と、彼の時代を隔たる500年後の19世紀になって、欧米ともに急速な発展を遂げて来たパブリック・ライブラリーとの2つを結びつける中世のかけ橋としての意味をになうものとなった。しかしながらペトラルカにおける‘私的図書館にかわる新しい理想’、すなわち大規模の公開図書館の基礎を築き上げる計画は<sup>39)</sup>、古代の図書館についての熟知 (Bekanntschaft), それからの刺激によるものであって、そのことは彼がベニス政庁に託した希望の中で、‘古代の図書館に匹敵するものを’とのべていることばの中からもうかがわれ、それは人文主義の鼻祖として、‘全く意識的に中世に対しては背を向け、古代を過去としてではなく、生ける現代として感得し、そこに移り住んでいた人’<sup>40)</sup>であったからである。一方ド・ベリの企図した図書館は、オックスフォード大学内に新しく設立されるカレッジに付設されるものであり、そこに自分の蔵書をすべて寄託し、結局は大学内における一般の利用に供する“広大な構想”に基づくものであった<sup>41)</sup>。

## 3

このように図書館の建設構想の面において、ペトラルカとド・ベリの2人は共通の基盤を歴史の上に分ち合う人であり、さらにはまた直接面談の機会をもつことができた間柄であったことから、ド・ベリに与えたペトラルカの影響を特に強調する人も少ない。しかしながらオァはこの点に関し、‘両者の親交範囲についてはこれまでいささか誇張されて来たようだ’とのべて、両者会談の内容に触れたペトラルカ自身の記録に言及している<sup>42)</sup>。すなわち彼はこの記録の中に、ド・ベリの学識 (scholarship) についてペトラルカがいただいた‘疑惑のかすかな投影’を看取しているためである。それはこの記録が、会談に際しての、またそののちにおけるド・ベリの態度をきわめて不誠実なものとして、そのことを責めるがごとき筆致をもって叙述されているからである。会談の主題となったのは、“古代人のスューリー”<sup>43)</sup> (*Thule of the Ancients*), すなわち極北にあると伝えているこの伝説の島 (*Ultima Thule*) が島名としているそのことばの意味についてであったが、イギリスにおいて高い教育を受け、また若い時から、このようにほとんど人々には知られていない事柄については異常なほどに知識欲を持ち続けて来たはずのド・ベリが、ペトラルカの疑問に対し、その場においては全く答えようとしなかったり、またイギリスに帰国後は手紙をもって督促をしたにもかかわらず、“強情な沈黙” (obstinate silence) に終始し、結局ペトラルカはこの“英国人との友好”を通じて、スューリーという語に関し新たに知り得たものは何一つなか

39) *Ibid.*, S. 49.

40) *Ibid.*, S. 48.

41) *Ibid.*, S. 46.

42) Inglis, J. B., tr.: *Ibid.*, xiv (Introduction by Charles Orr).

43) *Thule*. 世界の極北の土地に対するギリシャおよびローマ名。ギリシャの航海者ピュティアス (Pytheas, 前300年頃) がブリテン島 (Britain) から6日間の航海ののちここにたどりついたという。そこには人が住んでいて、穀類がわずかに成長してはいるが、みよりは悪く、夏は夜が長く明るい。残存しているピュティアスの著作 (断片) では、それがどこであるかの決定はなされていない。各時代の学者たちは、その地をスコットランド北北東のセットランド島 (Shetland), アイスランド, あるいはノールウェー海岸線のある場所と信じているという (*Encyclopaedia Britannica* 1968 ed.).



ったとして、その間のことを数々の疑惑と推測とを交じえながら書き綴っているからである。このことに関連してエドワーズ (Edward Edwards, 1812-1886) は、ド・ベリの特に図書収集の実際と行動の真意については、それを本当に理解し得た人はきわめて少いことに言及したあと、英国外における同時代の人々の中では最も偉大な人物であるこのペトラルカによってさえ、ド・ベリはいささか誤解されて来ているように思われるとのべ、この“記録”のことに触れている<sup>44)</sup>。またペトラルカ自身もその中で、ド・ベリとの友好関係を得たきっかけがいわば偶然であり、それはド・ベリが英国王の命を受けて教皇庁に使節として出向し、公務を処理する“一旅行者”として南仏アヴィニオン (Avignon) に帰任していたとき、しかもその時期はエドワード三世による対仏百年戦争が開始(1337)される数年前英仏関係のきわめて険悪な時であったことに触れている<sup>45)</sup>。彼の表現をかりると、‘英仏両国王間の長い戦争、その最初の種子がまさに発芽を見、血なまぐさい結果がやがてもたらされようとしていた時’のことであった。そしてド・ベリが教皇使節として派遣されたのは1330年と1333年の2度であり、したがってペトラルカとの会談はその中のいずれかの年、おそらくは1330年のことであつたらうと推定されている。またその会談の場所についてオアは若干の著者がイタリーであつたと伝えていることの誤りを指摘して、‘その場所はアヴィニオンであり、イタリーではなかった<sup>46)</sup>’と記している。すなわち当時は“教皇のアヴィニオン幽囚時代”(1309-’77)に属し、教皇はローマからこの南フランスの地に移されていた時のことであったからである。そしてペトラルカも1326年父の死去に伴って、ポローニャ大学 (Bologna, Italy) で法律学の勉学を打ち切り、かつて居住したことのあるこのアヴィニオンの地に帰り、そのまま教皇庁に仕官していたが、1330年では彼が26歳、ド・ベリの方は43歳であつた。

ヘッセルはこの2人について、

ペトラルカはド・ベリより年少であり、直接面識の機会を得た人ではあつたが、しかしながら彼は別個の文化圏 (Kulturkreis) に所属していた。すなわちド・ベリの方はスコラ学 (Scholastik) に深く根ざしていたのに対して、逆にペトラルカはイタリー人文主義の始祖となつたと記している<sup>47)</sup>。すなわち17歳という年齢上の格差、さらには彼が与えた定服を一様に身につけた20人の官員と36人の従者とを従え、荣誉と殊遇のもとで教皇に迎え入れられた英国王の使節<sup>48)</sup>と教皇庁に仕官する一職員、ド・ベリとペトラルカとの間にはこのような形でも大きな隔たりがあつたが、ヘッセルがここで指摘しているスコラ学と人文主義という、よつて立つ2人の思想的な基盤の相違は、それぞれの図書館観を探る上にもきわめて重要な要素をなすであろう。もちろんド・ベリが単にこのペトラルカのみに限らず、他のイタリー人文主義者との間に、ある程度

44) Edwards, E.: *Memoirs of libraries; including a handbook of library economy.* Lond., Truebner, 1859, Vol. I, p. 381 (Reprinted. N.Y., Burt Franklin, 1964).

45-46) 注42に同じ。

47) Hessel, A.: *Ibid.*, S. 48. なおド・ベリの視界がスコラ学の境界内にとどまっていたことについては、アーウィンもやや詳しく言及している (Irwin, R.: *Ibid.*, p. 182)。

48) Inglis, J. B., tr.: *Ibid.*, xiii (Introduction by Charles Orr)。

接触をもっていたことはまちがいないと伝えられているが、ダール (Svend Dahl, 1887- ) も指摘しているように<sup>49)</sup>、到底彼は人文主義者と呼ばれ得る人物ではなかったからである。

既述のように彼が収集した書物の数は約1500冊、中世における修道院文庫を特徴づけるものが“蔵書の貧弱”(der geringe Umfang)<sup>50)</sup>であり、したがって1000冊を越えるものはほとんどなく、500冊以上のところはその多数を誇っていた当時において、この数字はまさに驚異的であり、‘イギリスにおけるすべての司教が所有していた集書を合わせたその数よりもさらに多い’<sup>51)</sup>ものであったという。しかも1冊の法話書が200頭の羊と3樽の穀物、聖書全巻が土地つきの家屋一軒、ミサ典書2冊がフラン金貨200個、同じくほかのミサ典書が広いブドウ園と交換に取引きされているほど、当時書物はきわめて希こうでありまた高価でもあった<sup>52)</sup>。そして彼がどのようにしてこれら図書の収集を行なったかについては、“愛書”第8章の中できわめて率直に、また具体的に記述されているが、それらの中には外交使節としてヨーロッパ各国を訪れた際に入手したものが多く、その意味において彼が大使として3度にわたり在任したパリは、まさに“この世の極楽”(earthly paradise)<sup>53)</sup>ともいうべきところであり、ここで求め得た書物の数は多数に上るといえる。それは英仏間に緊張と陰悪な情勢が介在していた時期であり、したがって外交使節としての公務上は‘脱出するすべもない迷路’(inextricable labyrinths)の中に立たされながら、ここでの図書の探求と収集とは、そうした苦悩の境地からしばし離れ、のどかなふん囲気を吸収する機会ともなって、‘金庫のふたは開けられたまま、財布のひもは解いたまま、むしろいそいそと金を使い果して、ほこりとごみにまみれた、しかしながらその価値は計り知れない貴重な書物を買って行った’<sup>54)</sup>という<sup>54)</sup>。ジョンソン (Elmer D. Johnson, 1915- ) によると、ド・ベリにおける図書の収集は、‘ロンドンおよびヨーロッパの業者を通じ、つぎにはヨーロッパ大陸における彼自身の旅行を通じ、さらには多くの友人・同職者を通じて’行なわれたものであると記しているが<sup>55)</sup>、同時にまた修道院をもつ町や田舎を訪ねる場合、彼はけっして書物の探求を怠らず、‘貧窮の中からこの貴重な財宝’の発見につとめる<sup>56)</sup>という有様であったが、ヴァイスは、‘前例のない規模と方法’によってその収集が行なわれた事情をつぎのように伝えている<sup>57)</sup>。

ド・ベリはダラム司教職に昇任する以前から、自分にとって可能な限りのあらゆる手段を用いて図書の収集に当たったことは確実であり、その集書活動を停止せしめたものはただ彼の死のみであった。そしてそれら図書のうちあるものは購入によって、しかしその他のものには、宗教

49) Dahl, S.: History of books. 2nd English ed., Metuchen, N. J., Scarecrow, 1968, p. 82.

50) Hessel, A.: *Ibid.*, S. 29.

51) Inglis, J. B., tr.: *Ibid.*, xxiii; Thornton, J. L.: *Ibid.*, p. 20.

52) Johnson, Elmer D.: Communication; an introduction to the history of writing, printing, books and libraries. N.Y. & Lond., Scarecrow, 1966, p. 46.

53) Dahl, S.: *Ibid.*, p. 75; Edwards, E.: *Ibid.*, p. 379.

54) Edwards, E.: *Ibid.*, p. 378-379.

55) Johnson, E. D.: *Ibid.*, p. 56.

56) Edwards, E.: *Ibid.*, p. 301.

57) Weiss, R.: *Ibid.*, p. 114.

教団からの寄贈によるものも少くはなく、それらの中には彼が宮廷の中に占めていた勢力に頼り、恩寵と特惠とを得ようとするものがあつたことも事実である。1329年から1333年の間に、聖アルバンス僧院 (St. Albans Abbey) から、ローマの喜劇詩人テランス (Terence)、詩人ヴァーギル (Virgil)、修辞学者クウィンティリアン (Quintilian) と聖ゼラム (St. Jerome) のものを受けとっているが、それは贈り主が、エドワード三世の修道院に対する関心を深めようとし、そのあっせんのための誘い水として用いたものであつた。また同じ様な目的は聖アルバンス修道院長リチャード二世によって、ざつと30冊の書物が、わずかに銀貨50ポンドによってド・ベリに売り渡されており、もちろん修道院側にとって、そのような価格で売買契約を結ぶのは不本意のことであつたにもかかわらず、それが行なわれた背後には、ド・ベリのあっせんによってこの修道院長に対し、破門を宣告した人々を投獄することができる権限が付与されたという事実が蔵せられている。いずれにせよド・ベリが図書を入手したその方法は、そのすべてが好ましい手続を経たものとは限らず、したがってそうして得た書物の中若干は、彼がダラム司教昇任後返却の措置をとっている程である。

要するにヴァイスがここでのべ、そして指摘しているのは、ド・ベリをもって‘イギリスにおける最初の集書家’として位置づけるに当って、その集書過程にからまる‘むしろ好ましからざる方法’についてであり、実は当時にあつても、彼に対する非難と中傷は数多く行なわれたという。しかしながらそのような声は結局彼にとっては“抱き犬のほえ声” (barking of a lap-dog) にすぎず<sup>58)</sup>、それによっていささかも心の動揺を来すことなく収集が続けられたという。この点についてティラーは<sup>59)</sup>、‘ド・ベリがその著書の中で、図書獲得の手段について率直に供述していることは、とりも直さず彼自身の良心は、なんらそのことについて煩わされてはいなかつたことを明らかに教えてくれるものである。またその著書は、彼が良心の命に従う人物であつたことを示しており、事実彼は他人の悪口に自らをゆだねることもなかつたし、また自分の目にいかがわしいと思われた行為なら、あんなにもあからさまに記述することはけつしてなかつたことは確實である’として、“愛書”の中でド・ベリがきわめて率直に、図書入手の詳細を伝えていることそれ自体によって、彼には他人の非難や中傷に値するものは全くなかつた点を強調している。さらにまたオァによっては、ド・ベリにおける図書収集の究極の目的は、そのすべてをオックスフォード大学内の新施設に贈与することにあつた点が力説されて、つぎのように、いろいろな批判から彼を擁護する立場がとられている<sup>60)</sup>。

彼の図書収集に向けられた情熱は、けつして自己本位のものでも、また不純のものでもなかつたと、真実そのようにいうことができるであろう。というのは彼は友人たちがそれらの書物を利用することをもって喜びとしたし、また彼の確固とした目的は、最終的にはその蔵書を、す

58) Edwards, E.: *Ibid.*, p. 379.

59) Taylor, A., tr.: *Ibid.*, xiv (*Introduction*).

60) Inglis, J. B., tr.: *Ibid.*, xxiii (*Introduction by Charles Orr*).

べての学生が利用できるように、自分がかって学んだ大学に寄贈することにあつたからである。彼にみられる熱狂的なものはこの願望による点火の結果であり、この事実は、わいろ (bribes) として書物を受領したなどの非難に対する弁明として提供し得るであろう。というのは彼自身、‘正義の女神はなんらの損傷も被らない’ とのべているからである。

このようにして自ら収集に当たるとともに、同時に修道僧たちを雇用してその探求に当らせ、他方においては、その所有に帰した書写本の校訂・注釈の仕事を推進し、さらには写字生・彩色士・製本師など、書物作成に必要な人的要素も整え、蔵書中の相当部分が、こうした人々によってつくられて行ったという<sup>61)</sup>。

しかしながらド・ベリの蔵書に対しては、特別の施設が充當されていた訳ではなく、ただ彼の寝室 (chamber) にうず高く積み重ねられたままの状態であり、彼は寝台に到達するためには、書物の上によじ登って行かねばならない有様であったという<sup>62)</sup>。そのほか他の邸宅 (manors) にも図書が置かれ、さらには旅行に際し、残しておくには余りにも貴重なものは、車に積んで運んだとも記されている<sup>63)</sup>。そしてこれらの蔵書については、彼自身の監修のもとで、慎重に目録が作成されたにもかかわらず、その目録も失われて今日に伝わらず、したがって果してどのような書物が収蔵されていたのか、またその正確な冊数ももちろん明らかではない。ただ性格的にいってむしろ個性的なものであったと推察されている<sup>64)</sup>。それは“愛書”第11章において法律の分野は、“俗界学” (*geologia, or the earthly science*) と呼ぶにふさわしいものであるとして、民法書を求める意欲と努力はきわめて低いものであったこと、これに対してリベラル・アーツの書物は、その助けなくしてはとうてい聖書を理解することは不可能であるとの理由でその有用性に言及し、また第13章においては詩とその有用性を弁護し、第12章においても文法学者の古くなった著作を新しい写本につくりかえて行くために特別の考慮を払った事実などを記録しているからである<sup>65)</sup>。しかしながらド・ベリ自身の著作、またその友人や同居人などがその著作中に引用している書物を基にして、もちろん仮定的なものながら、しかし考えられ得る“ド・ベリ文庫” (*Bibliotheca Richardi de Bury*) の復元はけっして不可能なことではないともいわれている<sup>66)</sup>。

しかし、このようにして築き上げられた彼の集書も、結局はその死去によっていち早く散逸の運命をたどることになった。その最も大きな理由は、図書収集のためにその財のほとんどを費し、ために多大の負債を残す結果となったからである。オアの記するところにしたがうと<sup>67)</sup>、生前ド・ベリは大聖堂に対し数多くの寄付を行ない、また大きな支出を重ねていることから、教会に対

61) Weiss, R.: *Ibid.*, p. 114.

62) Irwin, R.: *The English library; sources and history.* Lond., George Allen & Unwin, 1966. p. 175.

63) Thompson, J. W.: *Ibid.*, p. 384.

64) Irwin, R.: *The English library...*, p. 175. こうして車に積んで運んだ書物の数が1500冊とする立場をとると、あちこちの邸宅に残されていた図書を合しての総数はそれをはるかに上回ることになる。

65) この第11・12・13章の内容については、トマス英訳本による。

66) Thomas, E. C., tr.: *Ibid.*, xiv (*Preface*).

67) Inglis, J. B., tr.: *Ibid.*, xxi (*Introduction by Charles Orr*).

して多額の財産を残したであろうと人々が予想していたにもかかわらず、その死後、財宝が蔵置されていると想像されていた貴重箱の中で発見されたのは一杯につまったリンネル・シャツ・半ズボンの類であり、‘彼の金離れのよさが、結局は何一つ残してはいない’ことが明らかにされただけであったという。

その蔵書が彼の死後たどった運命について人々の伝えるところはまことにマチマチであり、その真相は明らかでない。すなわちヴァイスは、ド・ベリが多くの負債を残して死去したことに関連して、‘遺言執行者たちは、遺言者の願望、すなわちド・ベリ自身は蔵書分配のことを望んでいたにもかかわらず、売却の措置をとらざるを得ないと考えるに至った。聖アルバンス僧院から入手し保存されていたものの中若干は1346年にその僧院によって買いもどされたが、他のものはどこへ行ってしまったかわれわれには分らない’と記している<sup>68)</sup>。一方またオハは、

伝えられるところ、彼の蔵書の運命は、少くとも若干のものは、その生前中おそらくは債権者から守るためにオックスフォード大学ダラム・カレッジのベネディクト会士会館 (hall of the Benedictine Monks) に送られた。そして箱の中に蔵められたまま、ヘンリー四世(1399-1413)の治世まではこのホールに保存されていた。そしてこの時取り出されて、読書机あるいは座席 (pew) につながれ、そのままヘンリー八世の時に及んだが、しかしこの王のときに分散されることになった。あるものはハンフリー公図書館 (*Duke Humphrey's library*) へ、他のものはベイリアル・カレッジ (*Balliol College*) へ、そして残りのものは王の侍医であるオーウェン (George Owen of Godstow) の許へ。しかしそれらのほとんどすべては宗教改革という怒りう時代に破滅をたどることになった。そしてこのすばらしい集書の中、知られている限りでは、わずかに2冊のみが現存している。その一つはボドリー図書館 (*Bodleian*) にある聖アンセルム (Anselm) その他による神学論文であり、他はソーリズベリー (Salisbury) の12世紀本であり、現に大英博物館に所蔵されている

と記している<sup>69)</sup>。しかしながら、ド・ベリの蔵書は生前・死後を通じて、上記のベネディクト会士会館に送付されたとするもの<sup>70)</sup>、あるいはまたその蔵書は1345年ド・ベリによって同会館に遺贈され、その会館から供与されたダラム・カレッジは、その集書を収容するために図書館を建設したといい<sup>71)</sup>、さらにはまた、ソーリズベリーの大型書写本は、ド・ベリの遺言執行人から買いもどしたものであるとか<sup>72)</sup>、その蔵書の運命についての記述には多くの点に相違がみられる。しかしながらこれらの書物が実質的に破滅の過程をたどったのは宗教改革期であり、特にイギリス王室による旧教文献に対する徹底的な弾圧の結果であった。エドワーズは<sup>73)</sup>、ダラム・カレッジ

68) Weiss, R.: *Ibid.*, p. 114.

69) Inglis, J. B., tr.: *Ibid.*, xxiv-xxv (*Introduction by Charles Orr*).

70) Thomas, E. C., tr.: *Ibid.*, xiii (*Preface*).

71) Clark, John Willis: *The care of books; an essay on the development of libraries and their fittings, from the earliest times to the end of the eighteenth century.* Cambridge, the Univ. Press, 1909, p. 137.

72) Thomas, E. C., tr.: *Ibid.*, xiii (*Preface*), Footnote.

73) Edwards, E.: *Ibid.*, p. 383.

に寄贈されたド・ベリの蔵書は、彼の本名に基づいて“アウンガーヴィル図書館”(d'Aungerville's Library)として知られ、数世代にわたって大いに利用されたことを伝えているが、それもエドワード六世(1547-'53)の時代に完全に破壊されたといい、グラニス(Ruth Shepard Grannis)はまた、ヘンリー八世(1509-'47)のダラム・カレッジの解体に際して分散したその蔵書に対して、“悲劇的な惨禍”が訪れたのは1550年、狂信的な新教徒エドワード六世の任命した委員達によって、オックスフォード大学の図書館が検閲を受け、“教皇的”であるとしてすべての装飾写本類が破壊され、他のものもそのことごとくが傷害と略奪にさらされたときであったとのべている<sup>74)</sup>。

## 4

エドワーズは、ド・ベリが非常な労苦と深い愛情とをもって収集したその集書を‘寛大な利用’のもとに置こうとした点で、彼への回想は最も名誉あるものになるとのべている。そしてこの一般へのいわば贈与、その動機と条件に関して、ド・ベリ自身が“愛書”の中でこのべていることを抜すいし、綴り合わせて、それらをつぎのようにまとめている<sup>75)</sup>。

われわれは長い間にわたり、すべてのリベラル・アーツの最初の保母である尊敬すべきオックスフォード大学の中に、永遠の贈物として1つのホールを建設し、必要な寄付をもってそれを豊かにし、かつわれわれの書物を寄託し、そのホールの学者に限らず、同大学の全学生が利用し研究する点では共通のものとなるようとの深く根ざした目的を抱いてきた…そのホール内に居住する5人の学者が会館長(Master)によって任命される…その5人に対して、図書の保管が委任される。そして5人中3人には、閲覧と利用のためなら、いかなる書物でも貸し出すことができる権限が与えられるであろう。しかし謄写と転写のためには、どの書物も室外への持ち出しは許さない。したがって世俗的・宗教的とを問わず、このわれわれの恩恵を受ける資格があると思われる学者は、書物の貸出しを要求すべきである。その際図書の保管者はまずその書物には重複本があるかどうかを慎重に考えねばならない。そしてもしあるとすれば、その中の一部を貸し出すことができるが、その時は手渡す書物の価値に相当する保証金をとり、かつ即刻その保証金と貸出し図書双方に関する記録を作成しておくべきである。しかしながら重複本のないことが判明した場合は、その会館所属の学者仲間でない限りにおいては、何人に対しても書物を貸し出すべきではない。すなわち館内での閲覧のみに限られる。しかし当会館の学者であれば誰に対しても、どのような書物でも、貸し出しを受けて利用することができる。そして図書保管者は毎年その報告書を会館長に提出しなければならない。また貸し出しを受けた人はすべて年に1回図書保管者に対してその書物を提示すべきである。そしてもし希望ならば

74) Grannis, R. S.: *Preface, 1906, The life of Sir Thomas Bodley written by himself together with the first draft of the statutes of the public library at Oxen, 1609. Literature of libraries in the seventeenth and eighteenth centuries, III, ed. by John Cotton Dana & Henry W. Kent, 1906, reprinted by The Scarecrow Reprint Corporation, Metuchen, N. J., 1967, p. 15.*

75) Edwards, E.: *Ibid.*, p. 382.

自分の保証金を確めることができる。

以上がティラーにより、ド・ベリの“愛書”が取扱っている図書館の実際問題 (library practice) の中でも特に著名なものとして指摘されている2つの事柄<sup>76)</sup>、すなわち書物を扱う場合の清潔 (cleanliness) と貸出規則 (regulations) の中、その後者に関連する部分であるが、同時にそれはド・ベリ自身が‘予め考案しておいた確定計画’ (fixed plan)<sup>77)</sup> であるとのべているものの全体的な姿でもある。またその「会館」はティラーの英訳本によっては特に“N会館” (N. Hall in Oxford) という名称が付されている<sup>78)</sup>。そしてそのような形で図書館が実際に建設されたと説くもの、あるいはその計画はついに実施に移されることはなかったと伝えるもの、その他これをめぐっての多くの疑問はすでに早くからなされてきた。たとえばクラーク (John Willis Clark, 1833–1910) が

ダラムのベネディクト修道士たちによって維持されているダラム・カレッジは、その“母会館” (mother-house) から図書の供給を受け、その図書目録は現に保存されている。そしてそのつぎに1345年ド・ベリによって遺贈された集書を収容するために1つの図書館がその場所に建設された<sup>79)</sup>

と記しているのはその一例である。これに対してド・ベリの伝記者が、オックスフォード内の図書館のことについては何一つ触れていない事実を挙げて、おそらくその計画は実施に移されなかったであろうと記している反対の立場があり<sup>80)</sup>、それら2つのものが交錯した形をなしている。いずれにしてもこれらはド・ベリ死後のことであるが、アーウィンの記述しているところによると、有能な行政官でもあったド・ベリとしては、多くの負債を背負ったままでの自分の財産をもってしては、とうていそうした会館や図書館を建設することは不可能であると悟っていたであろうという。そしてさらに彼は、ド・ベリが“愛書”の第19章 (終章の前) を書き綴っていた当時であっては、実はN会館も図書館も共に造られておらず、そして図書館は終に建設されることはなかったとし、ただ「会館」に関する限り、その計画は別に新しいものではなく、それより7年前の1338年ド・ベリと国王との間には、修道院長とダラムの修道僧12人のため、オックスフォードに1つの会館を建設することについて了解点に達していたことを伝えている<sup>81)</sup>。さらにはまたフォーゲルによるとそれより48年前の1290年、ベネディクト教団ダラム大聖堂の修道院長および修道僧たちは、オックスフォードの北面に、修道士団のための施設 (Collegium) 建設に着手していたという<sup>82)</sup>。しかしながらそれも彼の生前においては実現をみるに至らず、現在トリニティ・カレッジ (Trinity College) が占めているその場所に、ダラム・カレッジの建設をみたのは、ド・ベ

76) Taylor, E., tr.: *Ibid.*, xiv (Introduction).

77-78) *Ibid.*, p. 103 この会館に大文字でNとあるのは、‘空白にしてある’との意味と同一 (Irwin, R.: *The heritage...*, p. 194). またトマス英訳本では“—Hall at Oxford”と書かれている (p. 114).

79) Clark, J. W.: *Ibid.*, p. 136.

80) Thomas, E. C., tr.: *Ibid.*, xiii (Preface), Footnote.

81) Irwin, R.: *The heritage of ...*, p. 194.

82) Vogel, E. G.: *Ibid.*, S. 158.

りの後継者ハトフィールド司教 (Hatfield) の時代であった。したがってド・ベリをもってダラム・カレッジの創設者として記述しているものが多いにもかかわらず、事実はその計画者であったといわねばならないであろう。また彼をもって大学図書館の先駆者 (forerunner)<sup>83)</sup> とみなすのも同様の事情によるものであるが、さらにフォーゲルによつては“公開図書館の創始者”(Begründer einer öffentlichen Bibliothek) としての位置が与えられ<sup>84)</sup>、ダラム修道士団 (Durham Collegium) の研究のために残した図書館という表現のもとで特に1つの章を設け、その面からする叙述が試みられている。内容的には彼の青壮年期における学者・書物愛好者たちとの交わり、宮廷高官・高位聖職者として、また外交官として、図書獲得の上に占めていた有利な諸条件と入手手段、ついで“愛書”第19章を中心としての考察であるが、特に力点のおかれているのは最後の部分、中でも図書の貸し出し、それに関連する諸規則の制定であり、付随的には若い修道僧・学生に対し書物取扱上の心得が説かれている。しかしながらフォーゲルがド・ベリをもって公開図書館の創始者とした理由は、単にその蔵書をダラム修道士団の人々が研究するために提供するだけでなく、広く‘大学全体の全構成員に対してその利用は自由な状態におかれる’構想に基づいていたからである。したがってそれはなお限定された意味での公開であった。そしてイギリスの図書館史上、“パブリック・ライブラリー”の語は、1598年ボドリー (Sir Thomas Bodley, 1545-1613) が、荒廃したオックスフォード大学の図書館を再興するため、大学副総長に対して私財の提供を申し入れたその書簡の中で、‘パブリック・ライブラリーを、もとの利用状況にかえず’<sup>85)</sup>とのべている言葉によって、すでにそれ以前に固有名詞としても使われていたことが想察されるが、ボドリーの時代におけるこの語は、国家機関としての地位が与えられた図書館の意味であつて、1602年11月をもって開館したボドリー図書館 (Bodleian Library) は、そうした意味での確実な、そして永続的な基金をもって設立したこの国における最初の図書館であり、著述家としても著名なバートン (Robert Burton, 1577-1640) によつても、“国立図書館” (national library) と結局は同じ意味で、‘オックスフォードにおけるわれわれのパブリック・ライブラリー’ (our public library in Oxon) という表現がなされているという<sup>86)</sup>。イギリスの図書館が次第に公開・公共的性格を付与して行く過程は多くの段階を経て今日に及んでいるが、ド・ベリが抱いたその構想は、図書館に対してそれへの道を切り開き、しかもきわめて具体的に運営上の基本方針を策定している点でも開拓的なものであり、そうした歴史的な意味においてフォーゲルは“創始者”としての地位を付与したものであろう。

83) Grannis, R. S.: *Ibid.*, p. 14.

84) Vogel, E. G.: *Ibid.*, S. 156. なお彼の論文の第4節は、“Richard als Begründer einer öffentlichen Bibliothek” にあてられている (S. 156-160).

85) Irwin, R.: *The heritage of ...*, p. 226.

86) *Ibid.*, p. 227.



おそらくド・ベリにとって唯一の著作であろうという“愛書”(Philobiblon)<sup>87)</sup>は、彼がこの書の“序章”(prologue)の末尾でのべているように、主として“書物愛”(Love of Books)について論じたものであり、“フィロビブロン”というその書名は古代ローマ人の様式にならい、ギリシャ語をもって命名したものであるという。この書は序章のほかに20の章から構成されており、既述のように、はじめの16章は愛書家が、それにつづく3つの章は図書館員が深い関心をいただくものとして一応分けて考えることもできるであろう。そして最後の章は、学徒たちに対する訓戒と、かみかみの祈りのことばをもってみだされている。そして章末には‘ここにフィロビブロンは終わる’として、書きおさめのことばが連ねられている。ただそこにしるされている完結の日付が‘1344年1月24日’となっているものの外、その年を1345年としている2種類のものがあるが<sup>88)</sup>‘まさしく58歳が終ったとき’、すなわちその誕生日に筆をおいた記録の点では同一である。したがってその生年を1287年とすれば、1345年がその年に該当する。

ダールはこの書について、すばらしく美しい言語をもって、みずからの書物に対する愛好の情を表現した“賛歌”(paean)<sup>89)</sup>であるといい、ヘッセルもまた“書物に対する熱狂的な賛美歌”<sup>90)</sup>(begeistertes Loblied)としての評言を加えている。またその記述の形式についてケリー(Thomas Kelly)は自叙伝的であるとのべている<sup>91)</sup>。それはアーウィンのいうようにこの書が‘究極的には一般の利用に供するために、みずからの生涯についての弁明でもあり、またそれを正当化したもの’との体裁をとっているからである<sup>92)</sup>。ヘッセルが“弁明書”(Verteidigungsschrift)と呼んだのもその意味においてであるが<sup>93)</sup>、しかしながら果してこの書がド・ベリ単独の著述であるのか、

87) わが国にこの“フィロビブロン”を初めて紹介されたのは寿岳文章博士であろう。すなわち昭和6年9月15日JOBKの趣味講座として放送された“愛書雑話”の中で、このド・ベリのことに言及されているが(“書物の道”p. 3-5)、さらに昭和9年7月から“愛書経”と題して、トマス英訳本からの翻訳を“書物展望”に下記のように10回にわたって連載された。しかし第8章までで中絶した形になっている。

第4巻第7号(昭和9年7月)解説, 序品	第5巻第1号(昭和10年1月)第5
8号(8月)第1	2号(2月)第6
9号(9月)第2・3	4号(4月)第7
10号(10月)第4	5号(5月)第8
11号(11月)(つづき)	9号(9月)(つづき)

最近古田曉氏による全訳“フィロビブロン—書物への愛”(昭和47年9月大阪画廊フィルム出版部発行)が公刊され、わが国でもこの書物がきわめて身近なものになった。同氏は“解説”の中で‘翻訳にはまず、イー・シー・トマスのラテン語テキストを使い、おくれで入手したアントニオ・アルタムラのラテン語テキストと照合し、相異点についてはアルタムラ版を採用した’とのべられている。

88) 古田氏訳本およびトマス英訳本はともに1344年、ティラー英訳本は1345年としている。ツォラーが1344年説をとっていることについてはすでに言及した。

89) Dahl, S.: *Ibid.*, p. 75.

90) Hessel, A.: *Ibid.*, S. 46.

91) Kelly, T.: *Ibid.*, p. 27.

92) Irwin, R.: *The heritage of ...*, p. 183.

93) Hessel, A.: *Ibid.*, S. 47.

あるいはまた他の人々の援助のもとでなされたものであるのか、その点についてもいろいろな見解が行なわれてきたが、オァは、ド・ベリという人は、すばらしい人物たちによってつねにとり囲まれていることを喜びとし、それらの人々から学問上の話題が提供されることを歓迎していた事実に言及して、“愛書”そのものも、もちろん彼自身の読書ならびにその体験から生れたものではあろうが、しかし同時にまたそれは、彼の周囲に集っていた学者たちとの知的な交わり、彼等との談話が結実したその現われとみなすこともできるのであろうとのべている<sup>94)</sup>。

しかしながらこの“愛書”を、書物をほめたたえての賛歌であるとのべた同じダールによってこの著作は、同時に書物を虐待し酷使する人々に対する“辛らつな評言”にもなっていると記されている<sup>95)</sup>。直接にはこの書の第17章を指してのことばであり、内容的にこの書は“修道士という墮落人種”(“degenerate race of monks”)に対する書物からの告発(accuse)という形をとって書かれているとみなすからである。すなわちこの章自体は書物を手にする場合の心掛け、保管上の必要事項を主題としたものであるが、実際には修道院学校における当時の学徒たちによって書物が著しい汚染や破損を招いている事実を具体的に列挙し、きびしくそれを難詰することばを連ねているためである。そしてダールはこのことに付随して、ド・ベリの時代にあつては、書物文化と書物尊重の精神は衰退し、修道院における図書文化の退廃は急速に広まり、その結果つぎの15世紀になって改革運動、すなわち修道院生活を以前の理想に引きもどし、書物についての研究と書物の作成とを再び栄光の座に返して行くことを目的とした運動が、ベネディクト教団の中に現われては来たものの、それも永続せず、わずかにカルトジオ修道会(Carthusians)のみが活字印刷開始後も長く書写の仕事を継続して行ったにすぎなかったことに言及している。

またこのダールと同じく、“愛書”をもって、書物に対する熱狂的な賛美歌としてたたえているヘッセルも、ド・ベリがこの書の中で洩らしている“大いなる嘆息”(Klagen)、そして激しい語調で綴っている告発・弾劾(Anklagen)のことばに触れている<sup>96)</sup>。そしてそれらは、古いベネディクト僧院(Benediktinerabteien)のうちその多くのものが、中世も末期になると、宗教的・学問的精神を次第に喪失し、他方ではまた書物の収集ならびに謄写の意欲も消えうせて、文庫は放任されたまま、書写本の在庫も抵当物件とされたり、不注意によって台なしにされて行く実情に向けられた憤りと悲しみとから発せられたものであるという。

以上2人の説くところによっても明らかなように、ド・ベリの“愛書”は、その副標題としては“書物への愛”であったとしても、それは単なる愛書狂・蔵書癖のそれではなく、書物をもって‘永遠の真理の源泉、誠実な魂の光、あらゆる異教・異端と戦うため神から授けられた武器’<sup>97)</sup>、さらには‘教育のツールとしての不朽の価値’<sup>98)</sup>としてそれを捉え、そうした信念の披れきその

94) Inglis, J. B., tr.,: *Ibid.*, xxvi (Introduction by Charles Orr).

95) 注89と同じ。なおこれにつづく部分はp.76.

96) Hessel, A.: *Ibid.*, S. 35.

97) Hessel, A.: *Ibid.*, S. 46-47.

98) Irwin, R.: *The heritage of ...*, p. 183. つづく5か所の引用も同じ。

ものが、その著述における書物愛の内実を形づくっている。したがってこの書はけっして‘学術的な意味での傑作ではない’かも知れないが、しかし‘書物と学問の真実の価値について、著者の抱く信念を率直に開陳したもの’とみなすことができるであろう。そして彼が学問について言及する場合は、既述のように彼自身に深く根ざしているスコラ学の立場においてであり、しかもそのスコラ学自体が、学問の面においても、また教育の面からいっても、事実上“破産”(bankruptcy)を来しつつある現実を目前にして彼は、‘書物のもつ不朽の価値を信頼する宣言’の形でこの書物を綴っていったと解することもできる。そしてそのような信念と信頼の上に立って特に若い修道僧たちの自覚を促し、学問の再興を図ろうとすれば当然書物を収集してそれを与え、またその利用を容易にするための図書館の建設を必要とし、彼における図書の収集・図書館建設の決意と計画とは、こうした一般的な状況の中で、すでに若い時代からのものであったという<sup>99)</sup>。すなわち彼をしてそのような考え方に導いて行ったものは、直接には彼自身と最も近い関係にあった上述のような当時におけるベネディクト教団、その僧院の実情であった。そしてその結果はイギリスの歴史の上には、人間の教育的生涯の中で、1つの大きな図書館がになう重要性を、これほどまでにはっきりとみつめた人は、学者・為政者のうちにも誰一人として現われず、ド・ベリほどこの種の図書館を計画する事業に対して全身を傾倒した人物もまたなかった<sup>100)</sup>と評されるものとなった。

エドワーズによると、イギリスにおける修道者たちの生活あるいはその戒律が退廃して行ったのは、修道院そのものの驚異的な発展と表裏の関係をなすものであるという<sup>101)</sup>。すなわち急速な建造・広範な拡張・寛大な寄付金によって急激に発展を遂げて行った結果修道僧の不足を来し、ためにいわばその許容資格基準ともいべきものを引き下げて行くことによって辛うじてその数を満し得たのが当時の実情であったとのべているが、この間の事情についてはド・ベリ自身が“愛書”第6章の中できわめて具体的にそれに触れている<sup>102)</sup>。この章は托鉢修道者たち(Religious mendicants)に対して書物の側から苦情・不平をのべる体裁をとって書かれ、古代のものを賛美し、当時の修道者たちを非難する形式がとられている。すなわちまず福音的清貧の誓願を立てた最初期の修道士たち(professors)についてド・ベリは、聖書の研究によって無限の道徳律を掘り起すことができるが故に、あらゆる世俗的な学問には別れを告げ、全精力を集中して聖典への労働に献身し、昼夜を分たず“主”のおきてについて沈思し黙想を続けてきたこと、そして空腹・半裸の身をいとわず、書物の校訂と謄写に献身することによって偉大な利益がもたらされることを信じて疑わなかったが、他方ではまた同時代における在俗者たちも、そうした修道者の仕事と研究を尊重して、全教会社会の精神的利益のために、多額の金銭を費して世界のいろいろな場所で折に触れ収集した書物を提供して来たとのべている。そしてこのような初期における書物

99) Vogel, E. G.: *Ibid.*, S. 158.

100) 注98に同じ

101) Edwards, E.: *Ibid.*, p. 342 (Decline of learning in the English monasteries, chap. 11).

102) トマス英訳本(p. 41), イングリス英訳本(p. 50), ティラー英訳本(p. 35)のものをまとめて記述した。

への献身に対して彼自身の時代では、聖書の縁に手を触れる人さえきわめてまれで、それを解説する人もなく、あたかもそれは陳腐な物語、すべての人に分り切ったことのように取り扱われている実情を訴えている。そしてその原因についても、‘りんごを餌にして少年たちを修道生活に引き入れ、誓願を終れば…托鉢に出す’、そのような当時の事情に帰している。すなわちそれらの少年に対しては強制的にでも勉学に誘い、おそれをもってしても教義を教えこんで行かねばならないのにそれを行わず、その結果は長じて人を教える段になると無知を暴露し、こうした当初における小さな誤りが、終りには大きなものとなって、結局は“主”のことは侮り、靈魂の荒廃を招くとのべている。

以上は聖書あるいは主のことはについての研究がほとんど行なわれなくなった実情につき、ド・ベリが第6章において記述しているものの要旨であるが、さらに第5章では、書物一般についての同じくその最初期とド・ベリの時代との間における余りにも対照的な実情に触れている。すなわち第5章<sup>103)</sup>そのものは、修道士の中でも土地・建物などを所有している富裕修道士 (religious possessioners) たちに向け第6章と同様、書物の側からする苦情・不満を投げる形で綴られている。内容的には書物の保存・継承・謄写作成・研究の面における著しい退廃の実情をのべてその自覚と反省とを促したものである。すなわち古くは宗教教団の書物文化に対する崇高な献身によって書物の保護という点においては特に案ずることはなかったし、事実修道士たちはあたかも書物こそただ一つの富であるかのごとく、それとの親しい交わりをもって喜びとし、多くの者は祈とう時間の合間に自分の手で浄写するのが常であり、体を休めるために与えられている時間を削いで書物の作成に充当して来たことについて語っている。そしてそのような労苦のおかげで、現に多くの修道院には、天使の文字 (cherubic letters) で満たされた聖なる宝典が光を放ち、修道学徒に対しては魂の救済についての知識を、そして俗人の歩む道には快い光を与えているにもかかわらず、「現代」ではそうした“先人” (forefathers) の足跡をなお守り続けている人はきわめてまれであり、大多数の修道僧が課業と研究の対象としているのは、羊の群れと羊毛・農作物と穀倉・庭園とオリーブ園・酒と酒杯であり、日常忙しくしているのは書物の校訂ではなくて、酒杯を飲み乾すためであり、さらには修道院内における職務が、歓楽の歌・みだらな音楽となりつつあることを指摘している。そして最後に先人修道者たちの行跡を想い起させ、みずから誠実に書物の研究に献身すべきことを勧告し、さらに書物がなければあらゆる宗教は危険にさらされ、信仰はせとかけ (sherd) のようにかわき切り、世界に対してもなんらの光をもかかげ得ないことを説いている。

以上2つの章は、古い時代とド・ベリの時代とを対照的に、修道者・修道院生活の荒廃を、聖書ひいては書物文化一般を中心にしてのべたものであるが、第4章<sup>104)</sup>においても、“墮落した聖

103) 第5章についてはイングリシ英訳本(p.41)によった。

104) 第4章についてはトマス英訳本(p.27, 28, 33), イングリシ英訳本(p.33, 36, 37, 40), ティラー英訳本(p.23, 28, 34)のものをまとめて記述した。

職者”(degenerate clergy; degenerate race of clergy)・“忘恩の聖職者”(ungrateful cleric; ungrateful clerk)ということばを用いて、すでに聖職者としての地位を得た彼らにとって、その榮譽の基盤であり、また将来における榮譽の予告でもある書物が軽視・無視の取り扱いを受けている実情が詳細に取り上げられている。すなわち書物は聖職者の家から暴力と武力とによって追放され、あるいは奴隸や女捕りょのように売却されたり、酒場に抵当として置かれたまま引き取られることもなく放置され、さらには、共同下水溝の底なし穴に突っ込まれたり、‘書物が何物にもましてその毒性を恐れているユダヤ人・サラセン人・異端者・異教徒に引き渡される’など、当時書物が聖職者たちから被っている被害の数々、与えられている侮辱、それらの事例を列挙しながら、聖職者たちに向って、彼らがどんなに多くのものを書物から受けとって来たかについて心をめぐらして考え直すことを求めている。

6

ド・ペリは“愛書”の第18章<sup>105)</sup>において、多くの人々から彼に向けられて来た非難、すなわち過度の好奇心・物質的どん欲・虚栄の現われ・文学愛好癖などのことばをもって彼の集書行為が嫌悪の対象とされて来た事実に触れている。しかしながら彼は、‘秘められた願望の究極的な意向は人間からは隠されたままであり、それはただ心の監察者である神に対してのみ開かれている’<sup>105)</sup>と記して、彼における図書収集の真の意図が当時の人々には理解されなかったことについて述べている。そして彼のいうこの“秘められた願望”とは、オックスフォード大学内におけるN会館の建設、そこに蔵書のすべてを寄贈し、結局は大学の全学徒に共同の利用と研究の便宜とを永遠に提供することであり、それは早くから心の奥深く蔵していた堅い決意であったが、費用をいとわぬ図書の収集と謄写とは、教会社会を浄化するために必要な研究に対する真実の愛と、正統信仰強化の熱意に発するものであると記している。このようにして彼は単なる愛書家ではなく、書物のもつ本当の価値を信ずるが故に、しかも時代は学問の衰退が甚だしく、学芸を支えていた教会社会、またその実質的なない手であった修道僧によって書物は軽べつ無視され、追放・散逸・滅亡の過程をたどりつつあった現実を前にして書物への愛を説いた人であった。また彼による図書の収集も第18章の標題として選ばれているように、‘われわれ自身の楽しみのためだけでなく、学者たちの共通の便宜・利益のため’<sup>105)</sup>のものであった。彼における図書館建設計画はこの一連の関係における当然の帰結にはかならないが、しかしその図書館は、現代からみれば、きわめて限定的な意味のものであったとはいえ、公開図書館の創始と呼ばれるにふさわしい<sup>106)</sup>構想から成り、すなわちド・ペリ自身が第19章において述べていることばをかりると、彼の蔵書のことごとくは、彼自身、両親、そしてエドワード三世と王妃フリッパ(Philippa)の魂のために、永遠の贈り物としてオックスフォードのN会館に居住する学者全体に与えられるものであるが、しかし

105) トマスおよびティラー英訳本。

106) トマス英訳本(p. 114-115)、イングリシ英訳本(p. 133-134)を参照した。

その書物は、この町の学者や教師のことごとくに対しても、彼らが修道会所属の者であると俗人であるとを問わず、研究の推進とその用途のために、一定の規則のもとで貸し出すことができる方向性を企図したものであった。またそのために必要な全蔵書の目録もすでに作成を終ったことにも言及している。

このような図書館運営上の基本方針のもとで、彼が詳細に記述している図書の貸し出しを中心とした具体的な規則案は、慎重にして賢明な人々の助言を得て作成されたものであることを特記しているが、微細にわたるその内容は、オックスフォードという限られた地域であり、さらにはまたキリスト教徒として、しかも高位の聖職者としての限界に立っているとはいえ、学問の推進とその研究に資することを目的とする場合には、僧俗を問わず、どの書物に対しても貸し出しの要求を行うことができるとの原則を前提としたものであり、彼におけるライブラリー・エコノミーの基礎づけは、図書館に対する公開性あるいは公共性の付与と密接な関係のもとで行なわれているのを知ることができる。しかしながらツォラーのいうようにそれが最初のものであったかどうかは別として、最も初期のものとして、ド・ベリと“愛書”とがになう歴史的な意義は非常に大きなものといわねばならないであろう。